

神秘的自然主義建築家

アントニン・レーモンドの見た風景の原像

一流浪(ディアスポラ)するコスモポリタン

松野高久(建築家)



図1 アントニン・レーモンド(1888-1976年)
(Raymond in the early 1950s)
ニューホープの自邸にて。左から土屋重隆
氏、レーモンド(86歳)、妻、孫のジャン
トさん

1. プラハの多くの建築様式の混在と「モダニズム」の否定
—「レーモンド・スタイル」—

プラハという都市は、皇帝カレル4世が神聖ローマ帝国の首都として移し、14世紀に都市改造を行っている。以後、街の骨格はほとんど変わっていない。ロマネスクからゴシック、ルネッサンス、バロック、アール・ヌーヴォーと各様式の建物が混在し、街全体がまるで建築の博物館のようである。1922年に、旧市街の歴史地区はユネスコ世界文化遺産に指定されている。

『プラハ 建築の森』(田中充子、学芸出版社、1999年)と、『チェコ共和国・尽きない旅物語プラハ』(チェコツーリズム、2014年)の2誌から各様式の代表的建築を掲げると、

- ・ロマネスク(10C~13C) …聖マルティン教会のロトンダ(丸屋根の円形礼拝堂)(図1)
- ・初期ゴシック(13C) …旧新シナゴーク(ヨーロッパ最古)(図2)
- ・ゴシック(12C~15C) …ティーン聖母教会、聖ヴィート大聖堂、ティーン教会(図3)
- ・ルネッサンス(15C~16C) …シュヴァルツェンベルク宮殿、ベルヴェデーレ離宮(図4)
- ・バロック(17C~18C) …聖ミクラーシュ教会、ロレッタ聖母教会(図5)
- ・古典主義(アンピール、18C) …エステート劇場、聖十字教会(図6)
- ・アール・ヌーヴォー(19C~20C) …プラハ本駅、市民会館(図7)
- ・チェコ・キュビズム(1911~1925) …アドリア宮殿、黒い聖母の家(図8)
- ・アール・デコ …コルナ宮殿(図9)

レーモンドは幼少年期に生活したプラハの建築に、『自伝』では、

家族のクラドノからプラグへの移動は、全員に深い感化を与えた。夏も冬も湧きかえるような人波が、歩道を足早やに行き交い、店は飾りたてられ、カフェも、古いビアホールも、川もある大都市の感じに何かしら驚かされたのである。その上方、いくつかの丘の上の公園のどこからも、赤瓦の屋根や、沢山の教会の尖塔を見下ろせる、素晴らしい眺めがあった。街を歩いてリボンのようにくねるフルタワ川には橋がかかり、中でも最古のカールス橋はバロックの彫刻で装われていた。私の世代は、この世界がいまだかつて知らなかった、最も懐

然たる環境の中におかれていた。・・・しかし、すぐ外側には、素晴らしいロマネスク、ゴシック、ルネッサンス、バロックその他の建築が建っていたのである。私は学生時代、製図板の上の仕事に日を費し、夜ともなれば狭い石だたみの通りを徘徊し、橋を渡り、広場をよぎり、周囲を包む美しさを深く吸い込んでいた。

プラグはボヘミア王の土地であり、長いことドイツとローマ皇帝の土地でもあった。そしてこの都市は、キリスト紀元前から19世紀に至る古代の遺跡に満ちていた。町でぬきんでているのは、荘大なフラドチャニー城であり、ヨーロッパ史のあらゆる時代の多くの宮殿、有名な橋などあった。また、百教会の都市、百尖塔の都市としても知られている。プラグの最も優れた時代は、8世紀以後のゴシック時代であり、それはバロック時代へと続いている。私は、ローマ時代のものよりも、もっと美しい大建築が生まれていると思う。プラグは別としても、全国にはチェコ人、ボヘミア人、モラヴィア人、シシリア人、スロヴァキア人が住み、国じゅうが彫刻や絵画の豊富な古い建物で埋めつくされていた。国そのものが、山や平野や河のある美しい一つの風景なのである。学生時代の私は、機会があれば、夜と昼を問わず街を歩き、その建築の美しさに感激していた。若い私が吸収したこの街の影響は、生涯を通じてあらわれ、私のデザイン哲学の中にもあらわれた。

このレーモンドの原体験として、多くの建築様式からの影響は、のちに建築家になった後も、それは継続していた。レーモンドは「プラグの人口は、はっきりチェコ人とドイツとに分かれていた」と、書いているが、実は『チェコ共和国・尽きない旅物語プラハ』には、「プラハは何世紀にも渡って、キリスト教文化とユダヤ文化の交差点に形成されてきた町」として、実際は、「チェコでは、ドイツ人とユダヤ人とチェコ人という、長きにわたる民族の葛藤のなか、<スラブ民族の形>を探しとめた」と、あるが、しかしレーモンドは『自伝』にてチェコの民族構成の中であって「ユダヤ人」を書き入れることを恣意的にしなかったのは、レーモンドがユダヤ系であったことの傍証である。

レーモンドは建築家になった後も、ヨーロッパ在中も、それからアメリカに渡り日本に至るまで、その他多くの建築様式、建築運動と関わり合ってきたのである。



図1 聖マルティン教会のロトンダ
(丸屋根の円形礼拝堂)
(出典:『プラハ 建築の森』)



図2 旧新シナゴーク(ヨーロッパ最古)
(出典:『建築巡礼31 プラハのアール・ヌーヴォー 塗装都市の歴史と栄光』)



図3 ティーン聖母教会、聖ヴィート大聖堂、ティーン教会
(出典:『建築巡礼31 プラハのアール・ヌーヴォー 塗装都市の歴史と栄光』)



図4 シュヴァルツェンベルク宮殿、ベルヴェデーレ離宮
(出典:『プラハ 建築の森』)

■在ヨーロッパ

- ・アール・ヌーヴォー…ヴィクトル・オルタ
- ・ウィーン派…オットー・ワーグナー
- ・デ・スティール派…リートフェルト(オランダ)、J.P.P.アウト
- ・バウハウス(モダニズム) …W.グロピウス、M.F.D.ローエ

■在アメリカ

- ・F.L.ライト
- ・アルバート・カーン

■在日本

- ・オーギュスト・ペレー、フォイエールシュタイン
- ・ル・コルビュジエ
- ・スパニッシュ・スタイル

以上の多くの建築様式からレーモンドは各々の建物に適用する有効な様式を、時代経過と場所に合わせて選択した。それについて、『アントニン&ノエミ・レーモンド』(神奈川県立近代美術館、2007年)の「A.レーモンドのモダニズム:その設計手法」(三沢浩)で、「初期のレーモンドの建築スタイルの変化は、実に多様だったが、1930年代にはモダニズム建築の先駆となった。戦後にはそれが洗練され、自らのスタイルへと変化させた。しかしながら、そのような激しい建築の変化以上に、彼の生涯は若い時から波乱に富み、幾度か運命に翻弄されてきた。」と書くが、「モダニズム建築の先駆」という表現と、「それが洗練され」という表現も適確ではない。そして続けて、

生涯を通して日本の建築界で、特にモダニズム建築の生成と発展に直接関わった。彼の一生はモダニズム建築の歴史そのものであったといえるのである。

レーモンドがモダニズムと関わったという表現はふさわしくない。私も38年間のレーモンド設計事務所の在職中でも、レーモンド本人及び事務所時代も、モダニズム建築と感じたことは一度もなかった。しかし、三沢の言うように「レーモンド・スタイル」と、所員の間では木造住宅、教会を含めて、一般的にコンクリート建築のその標準ディテールも、そのように呼ばれていた。三沢は続けて、結論として、

レーモンドはモダニズム建築の要素を、日本の伝統的建築の中に見つけた。・・・日本の住まいは、春夏秋冬の四季に

応じて住まい、自然と同調するところを理解し、モダニズムの建築を実践しながら、それを超える思想を持つようと考えていたのである。「レーモンド・スタイル」とは、彼の唱えた「近代建築のための5原則」と共に、モダニズム建築の展開のための、キーワードとして存在していたのである。

しかし、レーモンドが日本建築に見出したのは、風土における「普遍性」であって、三沢は「それを超える思想」とするが、決してモダニズムではない。レーモンド自身も「真のモダニズムに向って」(1942年)に、

モダニズムという言葉は、あなた方を捕らえるための罠である。・・・どうしたら、現代建築は、われわれの現代の生活様式に適應するのであろうか。それは「自由」そのものである。・・・何が私のいう現代建築であるのか。まず、「現代的スタイル」の名の許にやってきた、偽りの美学とは、全く関係のないことを理解してほしい。・・・モダン、現実的建築、いかによばれようが、現代建築は、今日いわれるような、スタイルではない。観念的思想による考え方ではない。・・・現代建築は新しいものではない。逆に、全史上のよい建築の本質であり、長いこと忘れられていた、建物の原則と考えられる。

レーモンドは「近代主義」に対してモダニズムという言葉を使わずに「現代建築」として、自己の建築を定義する。そして、「私に現代建築の原則を教えてくれたのは、日本の建築である。」とのレーモンドの告白がすべてである。

戦前期のモダニズム建築は、白く四角いスタイルの近代性を表すのは、土浦亀城の五反田の自邸(1931年)、次作の木造の長者丸の自邸(1935年)など、初期のモダニズム建築の記念碑的作品で、バウハウス派と呼ばれている。私も近年このクルドサクにあるこの家を訪れたが素晴らしかった。正しくモダニズムであった。レーモンドの住宅とは異なっていた。土浦亀城は1917年から2年間、アメリカのF.L.ライトのタリアセンで帝国ホテルの設計に参加した後、日本の帝国ホテルの現場で働いた。しかし途中でライトと共にアメリカに帰った。その後日本に残ったレーモンドと異なった道を歩んだ。土浦は、日本でレーモンド事務所にいたフォイエールシュタインと交友し、ライト風からデ・スティールスタイル、モダニズムへの住宅を多く設計した。日本のモダニズム建築の先駆者はレーモンドではなく、



図5 聖ミクラーシュ教会、ロレッタ聖母教会 (出典:「プラハ 建築の森」)



図6 エステート劇場 (出典:「チェコ共和国オフィシャルプログラム」)



図7 プラハ本駅 (出典:「プラハ 建築の森」)



図8 黒い聖母の家 (出典:「建築巡礼 31 プラハのアー・ヌーヴォー 塗装都市の歴史と栄光」)



図9 コルナ宮殿 (出典:「建築巡礼 31 プラハのアー・ヌーヴォー 塗装都市の歴史と栄光」)



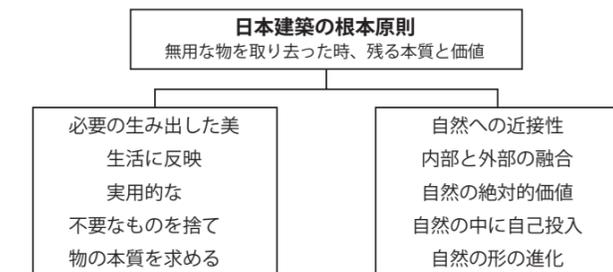
図10 ポカンティコヒルの家 (出典:「吉村順三作品集 1941-1978」)

土浦亀城であった。

2. 日本建築の根本原則 —必要の美と自然への近接— 「レーモンドは何を表現したいのか」

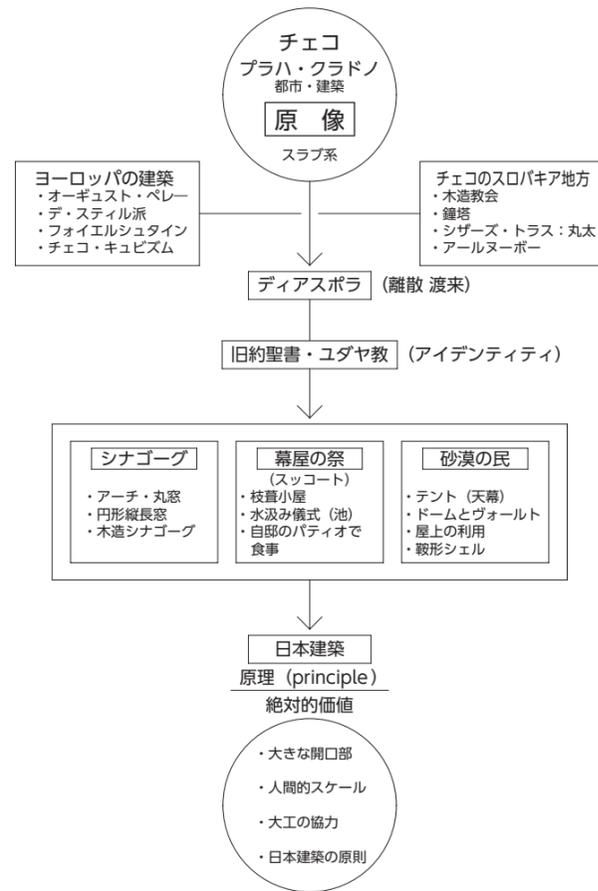
レーモンドは『自伝』の「14. 私の事務所、私の本」で、日本建築について具体的に自分の体験から、日本の現代建築の「原則」について、日本の古来の建築の中に明瞭に表れていると、

- ・日本の建築家は気象の厳しさに対抗して家をつくり、また一方、あらゆる生活の影をはっきりうちだし、こころの巧妙さを表現したりする。
- ・日本の住宅は自然の形の進化に似ている。あらゆる点で、正確、かつ妥当な解決を見出す内部からの欲求にもとづいている。同時に、生命の進化を十分に理解して、実用的であり表現的である。
- ・西洋人のいう装飾とは反対に、日本にあるのは必要の生み出した美である。
- ・日本の気象の烈しさは格別である。強い風、ひどい雨、寒さ、焼けつく太陽、地震、台風、それらは物の脆さを人に教える。
- ・住居物も、日本においては本質的価値はない。あらゆるものは、はっきりした目的のためにあり、また、目的とつながってのみ意味をもつ。
- ・日本以外のどこの文明が、美しくすることがそのまま、不要なものを捨て去ることであると示したであろうか。単純化と無駄を捨て去ることと、昇華させることこそ、趣味の人のいう優雅といえる。・・・無は常に明瞭であり、また純粋そのものである。不要なものを除き、物の本質を求めようとする力によって表われる。
- ・すべてを取り去った時、残る本質と原理とが日本の魅力の源である。
- ・日本人から物質の本質と表面的な価値を学んだ



以上の要約として、レーモンドが日本建築から学んだ根本原則を図表(左下)に例示してみた。それが、レーモンドが、「良質なモダニズム建築の体現」とか、「モダニズムを超えた技術と地域性との融合」という建築を求めたという表象ではなくて、南泰裕の言う、レーモンドは日本建築を通して「何を表現したいのか」という問いに対する自問なのである。(『モダニスト再考[日本編] 建築の20世紀はここから始まった』(彰国社、2017年))

レーモンドの原像(オリジナリティ)と日本の風土



3. 西欧の「唯物論」嫌い 霊魂(スピリット)の否定に対して —日本の霊性を伊勢神宮に—

レーモンドの『アントニン・レイモンド作品集:1920-1935』(城南書院、1935年)の序文に、

日本で仕事をする外人建築家には、ひとつの特権がある。現代建築の目標として再発見された基本的原則が、日本建築や文明の中で、具体化されていくのを眼前に見られるからである。西欧では、深く根を張る唯物主義が邪魔して、この純粋な原則にはまだ気がつかず、精神構造ばかりが追求されている。これらの原則は、日本の古来の建築の中に、きわめてはっきりと表現されているのである。

レーモンドが唯物論に言及するのは大変に興味深い。近代ではマルクスやエンゲルスが唯物論者である。「自然は人工より美しい」とする、この「自然さ」(natural)は、レーモンドの「五原則」の中で当初から、日本の大自然と密接な関係があるとする「プリンシプル」であった。

唯物論的思想は、古代ギリシャ初期にも物質を根本的実在として、精神や意識をも物質に還元してとらえる考え方である。つまり、宇宙(天と地)としての自然界の万物と、人間との間には、何物も存在しないというのが唯物論の世界観の起源である。

ギリシャ時代の唯物論思想家のエフェソのヘラクリテスは「唯物論は、ひとり自然界万物のみが唯一のリアリティであるとして、自然界の万物と人間の他には何ものも存在しない」と、創造者(神)や霊魂などを認めないのである。しかし「旧約聖書」では、その「万物」と「人間」の間に心情を含める霊魂(スピリット)としての、創造者である神などを認めるのである。したがってレーモンドは、やはり新約聖書の世界に在ると共に、日本の霊性の中にもいる。「日本建築の真髓」(『AIA journal』1953年)でも、「日本人の生活においては、物はただ物>ではない。何らかの観念の、それは象徴なのだ」と、同じく「日本建築の原則」では、「伊勢神宮は一つの観念を祀り、部分の一つ一つが、その精神をはっきり表現している」と、「伊勢神宮」という物が、「人間」にその観念を表示しているのである。近代のモダニズム建築は唯物論的で、もうその「物」は「人間」の機能という軌跡のみを斟酌して心情は、衛生思想という身体的な概念で、精霊(スピリット)とは関係がない。したがってレーモンドはこのモダニズムを否定している。そして、日本人は、彼らと自然との間に、何も割り込むのを許さない。得られる限りのもの、哲学、経済、芸術のすべてを、大自然から学んだ。「自然とは彼らと一体なのである」と唯物論の入り込む隙間などないのである。そして「デザインにおける永遠の価値」で、「神は大自然を造ったが、芸術家は大自然の中でただ一人の創造者であり、デザインには精神的理念が必要である」と、霊性の他に理念が現代的である

執筆者プロフィール

松野 高久 (まつの・たかひさ)
1944年東京都浅草に生まれる。1968年東京工業大学理工学部建築学科(清家研究室)卒業。同年、株式会社レーモンド建築設計事務所入所。建築設計の傍ら1997年第1回長塚節文学賞・最優秀賞「矢を負ひて跪れし白き鹿人—長塚節臨死歌考」を受賞。1993~96年日本工業大学建築学科非常勤講師。「長塚節研究会」の常任理事。2005年株式会社環境デザイン研究所入所。
主な著書に「ロゴスの建築家 清家清の「私の家」そして家族愛」(明文社 2018年)がある。2022年に谷口吉郎建築論を出版予定。

としている。

「レーモンド・スタイル」とは、自身が語っているのは、戦後の住宅デザインで「西欧と日本をうまく融合するという性格」であると、さらに「日本の自然を愛する態度と、西欧文明の結晶を融合させ、優れた材料と最高の技術を用いた住宅」のことであった。レーモンドの建築、特に木造住宅は、インターナショナル(国際化)することなく、日本の風土の中で、和洋の共存、内外空間の共存を計っていた。それは、「アナザー・モダニズム」としての「レーモンド・スタイル」で、それは、「モダニスティック・アーキテクチャー」であった。しかし、いくら障子を窓先に、部屋の間仕切りに襖を用いても、その空間は和風にならないのは、天井のデザインが伝統的な日本式でないからである。だから吉村順三の場合でも、自宅は天井をラワン・ロータリーベニヤ貼りとしても、やはり、和風ではない。吉村がレーモンドを超えてそれを実現したのは、アメリカのニューヨーク郊外の「ポカンティコヒルの家(ロックフェラー邸)」(1974年)(図10)であった。私はそれを傑作だと思う。

レーモンドの住宅設計の変遷の年表	
戦前 (タリアセン)	①F.L.ライト調のプレーリー・スタイル ・東京女子大学教官邸(1924) ・福井菊三邸(1923) ・田中次郎邸(w.1922) ・ポール・クロードル邸 ・リード博士邸(w.1924) ②チェコ・キュビズム(脱ライト) ・後藤新平邸(1923) ・東京女子大学寮・体育館(1924) ・星製薬商業高校記念講堂(1924) ③アメリカン・コロニアル ・エリスマン邸(1926)
1920年代	④デ・ステイル派 ・豊南坂の自邸(1924) ・ライジングサン石油会社社宅(1929) ⑤和洋様式 ・浜尾子爵夫人別邸(w.1928) ・トレッドソン別邸(w.1931) ・赤星四郎過未別荘(w.1931)
1930年代	⑥軽井沢式木造 ・軽井沢屋の家(w.1933) ・赤星吾介邸(1932) ・鳩山秀夫邸(w.1933) ・川崎守之助邸(1934) ・小寺別邸(w.1934) ・赤星鉄馬邸(1934) ・ケラー邸(w.1935) ・福井菊三別邸(1936) ・ウォーカー別邸(w.1935) ・ブレーク邸(w.1935) ・岡別邸(w.1936) ・トレッドソン邸(w.1936)
1940年代 (アメリカ)	⑦アメリカン・プレーリー(草原)ハウス ・ニューホープの家(1940) ・カレラ邸(1941) ・ストーン邸(1940) ・テラノ・ヒッチ邸(1941)
戦後 1950年代	⑧レーモンド・スタイル — アナザー・モダニズム ・箕野の事務所+自邸(w.1951) ・ドーランズ邸(w.1954) ・スタンダード石油会社社宅(1951)(ソコニーハウス) ・葉山別邸(w.1957) ・ICI教官邸(w.1960) ・ブローワー邸(w.1952) ・ブライス邸(1963) ・フィッシャー邸(w.1952) ・軽井沢の新スタジオ(w.1963) ・サロモン邸(w.1953) ・足立別邸(w.1966)(樫の木の家) ・カニングハム邸(w.1953) ・原田邸(w.1954) ・伊藤邸(1959)
1970年	・森村邸(1955)